

七九ある僧人の許にて氷魚(ひを)盗み食ひたる事 宇治拾遺物語卷五・十

これも今は昔、ある僧人主 語のもとへ行きけり。酒などすすめけるに、氷魚

はじめて出で来た力変連用 完了たり連用りければ、あるじ2 形シク連用 珍しく思ひて、もてなしけり。ある

じ用の事ありて、内へ入りて、また出でたりけるに、この氷魚の、

殊の外形容動詞連用形 形容詞連用に少なくなりたりければ、あるじ、いかにと思へども、いふべき

やう形容なし連用もなかりければ、物語し居たりける程に、この僧の鼻より、氷魚の

一つ、ふと出でたりければ、あるじ3 シク形容あやし連用 下二おほゆ連用 あやしう覚えて、「その鼻より氷魚の

出でたるは、いかなる事にか」といひければ、取りもあへず、「この比

の氷魚は、目鼻より降り候なるぞ」といひたりければ、人皆、はと笑ひけ

り。

1 鮎の稚魚

2 ここは、主語がないとわかりにくいので、書いてある。常識でわかるところは省略。

3 「怪し・奇し・異し」で異様なものを不審に思う感じが原義

4 氷が降る雹(ひょう)ということばは氷が語源。鎌倉時代にはあったようだ。